

主イエスが引用された詩編には「わたしの右の座に就くがよい。」と記されています。教会はそれが、復活の主が父なる神の右の座に就かれることを、主御自身が語られたことを示すものとして受け止めてきました。

使徒信条は「天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまへり」と告白しています。これは、新たなメシアの姿です。ダビデの子であり、そして今は神の右に座しておられる方です。

神の右に座しておられることはわたしたちの目を上に上げさせるものです。コロサイの信徒への手紙三章一節に「上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。」と教えられています。そこにわたしたちに与えられたメシアの姿があります。救われた者の生き方は、上にあるそのお姿を見上げることにある。そのため「上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。」(三章二節)といわれています。

信仰者の生き方は頭(こうべ)を上げることにあるといわれます。それは地上のものの方を知っており、その一方でその空しさを知っているからです。ヨハネの手紙一 二章一五節以下に「世も世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にありません。なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出るからです。世も世にある欲も、過ぎ去って行きませぬ。しかし、神の御心を行う人は永遠に生き

き続けます」。世にあるものとして「肉の欲目の欲、生活のおごり」が挙げられます。生活のおごりは口語訳では「持ち物の誇り」と訳されていました。

美しいものや、人を満足させるようなこと、高尚なこと、あるいは羨ましがられたり、欲しがられるものを得ようとすることです。人の目、人の口を気にし、人を見ようとします。教会にも入り込んでいきます。

そのような時にはまさに上を向いていないのです。人が見てよさそうなのは過ぎ去るものです。

しかし、人は地上の生き方が身に付いていてもそこに惹かれてしまします。過ぎ去るもの、むなしなもの、気がついていてもそれに惹かれてしまします。

わたしたちにはそれを見分ける必要があります。なぜなら、過ぎ行くものに埋没して、過ぎ行くものとなることは、主の御心に反するものだからです。偏なしに愛されていることに反することです。神の右に座して、わたしに目を注がれる、そのまなざしを見失うことになるからです。

主が真にメシアとしてなされたことは、わたししたの罪と死からの解放でありました。イザヤ書五三章には苦難の僕の姿が語られています。五節に「彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」と。これはこのまま十字架の主イエスを語るものです。

今日の箇所は、主イエス自らメシアであることを表しているところですが、さらにここから主イエスは十字架に向かつて歩み出されま

す。わたしたちはこの主のお姿を真のメシアの姿として心に留める必要がある。そして目を上げる必要があります。

礼拝は、われらの目を地上のものから上げ、頭を上げさせるものです。わたしたちは聖書の言葉に導かれて目を上げることができま。そのように、罪赦されて生きる望みは、常に新たにされなければならないものです。

油断すればすぐに世のもの、世の知恵や仕組みに頼るようになります。礼拝は週ごとに行われます。礼拝が新たな礼拝に向けて目を上げて生きる力となるためです。この礼拝に力付けられて、新たな礼拝に向けて歩み出しましょう。(七月一四日 公同礼拝)

## 六月講壇一覧

第一主日(六月二日) 公同礼拝

「喜びにあふれる」 姜俣米牧師

イザヤ 五三・七〇八

使徒言行録 八・二六〇四〇

第二主日(六月九日) 公同礼拝

(こどもの日・花の日)

「のほなをみなさい」 高橋和人牧師

マタイ 六・二五〇三四